

## 6 ぶどう

### 地域慣行基準

#### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
巨峰、ピオーネ、ロザリオビアンコ、ナガノパープル	10	県下全域
上記以外の品種	14	県下全域

#### (1) 特徴及び吸収特性

ぶどうの年間養分吸収量は、10a 当たり窒素 7.0kg、リン酸 2.5kg、カリ 6.6kg、石灰 6.8kg、苦土 1.1kg 程度である（表 1）。各養分の吸収割合は、窒素：リン酸：カリ：石灰：苦土で 100:36:95:98:16 となる。比較的石灰を多く吸収することがわかる。

表 1 ぶどうの養分吸収量

品 種	樹 齢	10aあたり養分吸収量*			備 考
		窒素	リン酸	カリ	
デラウェア		9.0	4.5	10.9	小林（平 2）
デラウェア	1～25年生	10.2	2.0	7.2	小豆沢（H 7）
巨峰	4年生	5.3	2.0	5.0	山形園試（平 7）
ブラック クイーン		6.3	2.5	6.2	広保（昭46）
マスカット ベリーA		5.7	2.2	5.3	広保（昭46）
ローズ シオータ		5.5	2.1	5.2	広保（昭46）
平均		7.0	2.5	6.6	

\*10a当たりの収量を1,500kgとしたときの吸収量。

樹体に吸収される窒素の内訳は、**樹体の全窒素量の約 80%が土壌から吸収**されたもので、残りの約 20%は樹の貯蔵窒素である。また、土壌から吸収される窒素のうち、**75～85%が土壌より発現する土壌窒素（地力窒素）**で、残りの 15～25%が施肥窒素である。このように樹体への窒素吸収は地力窒素の影響が非常に大きい。施肥量を決定する上で地力窒素の多少を考慮する必要がある。

#### (2) 標準的な施肥法

**基肥は収穫後なるべく早く 10～11 月に施用**する。

流亡の心配される砂質土壌や多積雪地帯では 60～80%を基肥として、20～40%を春先に施用してもよい。

**有機質肥料を用いる場合、分解が緩やかなため 9月～10 月中**に施用する。

短梢せん定による無核栽培の場合、**強樹勢**となりやすいため、**移植後数年間は窒素施肥を行わない**。樹勢が落ち着いてきたら「有核巨峰」に準じて窒素施肥を行う。

**追肥は**、より有効な時期に吸収効率を高めるために行うのであるが、時期を誤ると悪影響が現れやすい。また追肥時の天候によって吸収が左右されるので、干天が続く

場合などにはかん水をし、吸収促進をはかることも必要である。

非黒ボク土壌では、80%を基肥に施用し、残りを樹勢をみながら結実確定後（6月下旬）から8月上旬に追肥で施用する。ただし短梢せん定栽培では、副梢の発生を助長する恐れがあるので、結実確定後の追肥は実施しない。

**礼肥（追肥）の狙い**は収穫後に弱った樹勢を回復させるためであり、貯蔵養分の確保の上でも効果が高いため、収穫後に施用する。しかし晩生種では収穫早々に落葉してしまうので、収穫前に施用してもよい。ただし秋伸びをさせるような礼肥では好ましくないので、この場合も樹勢を見ながら行う。

リン酸は全量基肥とする。カリは基肥に30～40%、残りを6月中旬～7月上旬に追肥する。リン酸、カリ共に土壌中に過剰蓄積している傾向であるので、土壌診断の結果に応じて減肥する。